〈言語を語る言語〉の不自由

川　原　潮　子

ここで扱うのは〈言語を語る言語〉――メタ言語の語彙としての文法用語の用法についてである。複数の言語を横断的に考察しようとする場合，同じ用語が使われていてもまったく異質の対象を指していたり，時には実質的に同じものに対して異なる用語が使われていたりすることによって，収拾のつかない混乱に迷い込む危険が常につきまとう。というのも，個別言語の文法記述の伝統において，特定の用語が選ばれたのには歴史的経緯があり，そのことが〈言語の歴史的制約〉として働くからである。

1. 文法用語〈完了〉の用法

1. 1. 〈完了〉という用語とアスペクト

英語の〔*have* / *has* + 過去分詞〕で表わされる動詞の形式は，〈現在完了〉present perfect と呼ばれる。この perfect という語を文法用語として使うのは，もともとラテン文法で過去を表わす動詞の形式の一つを指す perfectum〈完了〉から来ている[1)]。

ラテン語動詞の過去の表現にはもう一つ，imperfectum〈未完了過去〉と呼ばれる別の形式がある。この名称の語頭の *im-* は，たとえば *possible* に対する *impossible* と同様，否定の接頭辞で，直訳は〈不完了〉となる。〈未完了過去〉は持続・反復または習慣的な過去を表わす形式であり（「……していた」，「たびたび……した」，「いつも……したものだった」），これに対し〈完了〉は一回限りで終わった過去を表わす。

ラテン語動詞における perfectum と imperfectum のこのような使い分けは，一般にアスペクト aspect の違いと呼ばれるものである。つまり，現在・過去・未来という時称 tense の区別とは別に，ある動作が一回的か持続的か，といった違いに着目して表現し分ける範疇を指す。

英語の動詞には別に，〔*be* + *-ing* 形〕で表わされる〈進行形〉progressive と呼ばれる形式がある。これは英語独自の発達[2)] で，ドイツ語の *-ung* に終わる抽象名詞と同源の動名詞 *-ing* 形が，本来これとは別の形式であった現在分詞の機能を吸収し，独特の動的な機能を担うようになったことに由来するものである。すなわち，動詞から派生して「……している」という形容詞的意味を持つ現在分詞を述語的に使う用法と，〔*be* + 前置詞 *on* + 動名詞 *-ing*〕

で「まさに……しつつある（する途上にある）」という表現形式が融合したところに，英語の〈進行形〉の形式と機能が生じている。

この英語の〈進行形〉も〈非・進行形〉に対しては，やはりアスペクトの違いを示すと言うことができる。*'He reads a book.'* に対する *'He is reading a book.'* の違いである。

英語動詞の〈進行形〉のアスペクトは，動作の持続・継続を表わすという意味で，どちらかと言えばラテン語の imperfectum に近い。たとえば英語の〈過去進行形〉の文 *'I was sleeping.'* をもしラテン語に訳すとすれば，間違いなく〈未完了過去〉*'Dormiēbam.'*――〈完了〉*'Dormivī.'* ではなく――となるであろう。

動詞の imperfectum ということは，本来なら perfectum〈完了〉とはアスペクト的に相入れず対立するはずである。しかし実際には英語動詞の〈進行形〉は，〈完了〉と呼ばれる形式と対立しないばかりか，〔*have / has* + *be* の過去分詞 *been* + *-ing*〕で〈現在完了進行形〉なる形式まで存在する。これはいったいどういうことなのか。

実は英語動詞の〈現在完了〉では，(1) *'I have / I've finished my homework.'*（「私は宿題を終えてしまった」）のような文字どおりの〈完了〉の用法はその一部にすぎず，ほかに (2)「……したことがある」という〈経験[3]〉と，(3) *'I have / I've lived here for three years / since 1999.'*（「私はここに 3 年間／1999 年以来住み続けている」）のような〈継続〉の主な用法があって，「結果が現在に及んでいることに重きをおいて表現する形式」などと説明される。

英語動詞の〈現在完了進行形〉は〈現在完了〉の用法中，この (3)〈継続〉用法の延長上に位置づけられる。つまり，*to live*（「生きる，生活する」）のようないわゆる状態動詞 state verb――それ自体に持続的な意味を持ち，通常は〈進行形〉を取らない動詞――は，〔*have / has* + 過去分詞〕の形式で〈継続〉を表わし得るが，それ以外の動作動詞 action verb では〈継続〉の意味を明確にするために，さらに〈進行形〉の形式が組み込まれるのである[4]。

それにしても〈継続〉とは，明らかに〈完了〉とは相反すると感じられる概念ではないか。このような用法を持つ英語動詞の〈現在完了〉present perfect は，その名の由来となったラテン語のように imperfectum と対立するアスペクトとしての〈完了〉perfectum とは，似て非なるものと言わなければならない。

1. 2. ラテン語～ロマンス語とギリシア語の動詞アスペクト組織

ラテン語から分化して生じたロマンス語の一つであるフランス語では，ラテン語動詞の〈完了〉の形式は，〈単純過去〉passé simple と呼ばれる形に受け継がれている。一方でラテン語動詞の〈未完了過去〉は，フランス語動詞の〈半過去〉imparfait と呼ばれる形式につながっている。

フランス語動詞の〈単純過去〉は，現代語では「物語の過去」と呼ばれるように小説などの書き言葉の叙述に限られ，話し言葉では用いられなくなっている。代わりに用いられるの

表 1　ラテン語 *amō*「愛する」の〈未完了過去〉と〈完了〉の人称変化

〈未完了過去〉

	sg.	pl.
1	*amābam*	*amābāmus*
2	*amābās*	*amābātis*
3	*amābat*	*amābant*

〈完了〉

	sg.	pl.
1	*amāvī*	*amāvimus*
2	*amā(vi)stī*	*amā(vi)stis*
3	*amāvit*	*amā(vē)runt*

表 2　フランス語 *aimer*「愛する」の〈半過去〉と〈単純過去〉の人称変化

〈半過去〉

	sg.	pl.
1	*j'aimais*	*nous aimions*
2	*tu aimais*	*vous aimiez*
3	*il / elle aimait*	*ils / elles aimaient*

〈単純過去〉

	sg.	pl.
1	*j'aimai*	*nous aimâmes*
2	*tu aimas*	*vous aimâtes*
3	*il / elle aima*	*ils / elles aimèrent*

は〈複合過去〉passé composé と呼ばれる形式で，〔*avoir*（または *être*）の現在人称変化＋過去分詞〕で表わされる。

つまり，過去時称におけるラテン語動詞の〈完了〉と〈未完了過去〉の使い分けは，フランス語の書き言葉では〈単純過去〉と〈半過去〉，話し言葉では〈複合過去〉と〈半過去〉の使い分けに受け継がれて生き続けていることになる。同じくロマンス語のイタリア語では，フランス語動詞の〈単純過去〉にあたる形を〈遠過去〉passato remoto，〈複合過去〉にあたる形式を〈近過去〉passato prossimo などと呼ぶが，おおむね同様の使い分けを受け継いでいる。

フランス語動詞の〈複合過去〉の助動詞として主に用いられる *avoir* は，「持つ」を原義とするいわゆる HAVE 動詞であるから，これは英語動詞の〈現在完了〉とほぼ並行する形式と言える。一方の *être* は BE 動詞であるが，〈複合過去〉の助動詞としてこれを用いる動詞には，場所の移動や状態の変化を表わす一部の自動詞，および再帰代名詞を伴う代名動詞が含まれる[5)]。

ラテン語と並ぶもう一つの古典語であるギリシア語の動詞には，過去を表わす形式としてラテン語と同様の〈完了〉*παρακείμενος* parakeímenos と〈未完了過去〉*παρατατικός* paratatikós のほかに，〈アオリスト〉*ἀόριστος* aóristos と呼ばれる形式がある。〈アオリスト〉は〈不定過去〉などと訳されるが，過去に起きたことを端的に記述する形式とされる。

歴史的にみると，過去を表わす動詞の形式として〈完了〉〈未完了過去〉〈アオリスト〉の 3 種があるギリシア語の体系のほうがより古く，ラテン語では文字記録以前の段階で，本来の〈アオリスト〉が〈完了〉に合流して一つになったらしい。用法上もラテン語動詞の〈完

了〉には，ギリシア語の〈アオリスト〉にあたるものが流れ込んでいる。これに比べるとギリシア語動詞の〈完了〉の用法はより限定され，動作の結果に重きをおく性格がはっきりしている[6)]。

1.3. アスペクト対立の形式を欠くゲルマン語動詞

歴史時代の下位区分に分化する以前のインドヨーロッパ祖語の動詞組織に，もしもギリシア語のような，過去時称において〈完了〉〈未完了過去〉〈アオリスト〉の3種のアスペクトをすべて形態法的に区別する体系を想定するとすれば，英語やドイツ語を含むゲルマン語では，文献の登場するはるか以前の時代に，この体系は著しい単純化をこうむっていたとみなければならない[7)]。

ゲルマン語最古の文献である後4世紀の聖書翻訳に用いられたゴート語の動詞組織において，直説法には〈現在〉と〈過去〉を表わす各々一とおりずつの形式が存在するのみである。未来時称を表わす固有の形式はなく，動詞の〈現在形〉は未来の表現にも使われるから，むしろ〈非・過去〉とも呼ぶべき時称を表わす。そして過去を表わす時称としては，いわゆる〈(単純) 過去形〉Präteritum のみが存在する。ギリシア語やラテン語とはまったく対照的な，このきわめてシンプルな動詞の時称体系こそ，ゲルマン語の大きな特徴の一つである。

ゲルマン語の動詞には，グリム J. Grimm の命名に由来するゲルマン文法特有の用語で〈強変化〉と〈弱変化〉と呼ばれる2種類の区別がある。〈過去形〉は強変化動詞では母音交替 Ablaut を伴い（**表3** 参照），弱変化動詞では英語 -(*e*)*d*，ドイツ語 *-te* のような歯音 dental の要素を語末に付加して表わされる。かつては両者の間に微妙な意味の違いがあったともされるが，その区別は歴史時代にはほとんど忘れられ，〈過去形〉という単一のカテゴリーと感じられていた。

前者はインドヨーロッパ祖語が本来持っていた動詞の完了語幹の形成法[8)] を組織的に発展させたもの，また後者はゲルマン語独自の発達で，起源的には英語 *do* の過去形 *did* にあたる要素を，膠着的に融合させたものとされている。他の品詞から新しく派生したり，また借用された動詞は弱変化となる。つまり弱変化のほうが生産的なタイプであり，いわゆる規則動詞はこれである。一方，強変化動詞はすべて不規則変化となる[9)]。

このようにゲルマン語ではその文献の伝統の初期から，動詞の過去を表わす形式としては1種しかなく，ギリシア語やラテン語の動詞にみるようなアスペクトの区別を表わす形式は持っていない。強変化動詞の〈過去形〉はインドヨーロッパ祖語における〈完了〉の形式の流れを引くとみられるものの，〈アオリスト〉や〈未完了過去〉に相当する形式の痕跡は見当たらない。

歴史時代のゲルマン諸語は，英語動詞の〔*have* / *has* + 過去分詞〕による〈現在完了〉のように，助動詞を用いた回説的 periphrastic[11)] な方法による諸種の時称とアスペクトの表現

表 3　ゲルマン語の強変化動詞の変化表の例

英語			ドイツ語			
不定詞	過去形	過去分詞	不定詞	過去基本形	過去分詞[10]	意味
break	*broke*	*broken*	*brechen*	*brach*	*gebrochen*	「壊す」
come	*came*	*come*	*kommen*	*kam*	*gekommen*	「来る」
drink	*drank*	*drunk*	*trinken*	*trank*	*getrunken*	「飲む」
eat	*ate*	*eaten*	*essen*	*aß*	*gegessen*	「食べる」
fly	*flew*	*flown*	*fliegen*	*flog*	*geflogen*	「飛ぶ」
give	*gave*	*given*	*geben*	*gab*	*gegeben*	「与える」
get	*got*	*gotten*				「得る」
know	*knew*	*known*				「知っている」
			nehmen	*nahm*	*genommen*	「取る」
			rufen	*rief*	*gerufen*	「呼ぶ」
see	*saw*	*seen*	*sehen*	*sah*	*gesehen*	「見る」

形式を編み出している。ドイツ語の動詞にも〔*haben*（または *sein*）の現在人称変化 + 過去分詞〕という形式があり，英語と同様に〈現在完了〉と呼ばれる。助動詞 *haben* は英語 *have* と同源・同義の HAVE 動詞であり，*sein* は BE 動詞に相当する。〈現在完了〉の助動詞に *sein* を用いるのは，*sein* それ自体と，場所の移動や状態の変化を表わす一部の自動詞であって，フランス語動詞の〈複合過去〉における HAVE 動詞 *avoir* と BE 動詞 *être* の使い分けに一部通じるところがある[12]。

ドイツ語動詞の〈現在完了〉は，用法においてもフランス語の〈複合過去〉に近い。ドイツ語でも動詞の本来の〈過去形〉はフランス語の〈単純過去〉と同じように，話し言葉ではほとんど用いられなくなっているため，代わりに〈現在完了〉が過去を表わす形式として用いられる。英語動詞の〈現在完了〉は *yesterday* や *three years ago* など，明らかに過去を表わす語句とともには使われないことになっているが，〈過去形〉の代用として使われるドイツ語動詞の〈現在完了〉には，このような制約はない。

HAVE 動詞の *have / has* や *haben* を助動詞とする英語・ドイツ語の〈現在完了〉は，同様に *avoir* を用いるフランス語の〈複合過去〉の起源にもなった，俗ラテン語の〔*habēre*（= HAVE 動詞）+ 完了分詞〕という表現形式[13] をモデルとしたものらしい。ただ注意すべきは，ゲルマン語は〈未完了過去〉――フランス語動詞の〈半過去〉にあたるアスペクトを明示的に表現する動詞の形式を，かつて持ったことがないという事実である。そのためにドイツ語動詞の〈現在完了〉にも，フランス語動詞の〈複合過去〉が〈半過去〉に対するようなアスペクトの対立はみられない。

英語独自の〈進行形〉も，このような imperfectum を表わす動詞形式の欠落を補うために発達したものとみることもできる。ただし英語の〈進行形〉のアスペクトは過去時称よりもむしろ現在時称における区別として発生し，のちに他の時称へも広がったとみられるもので，伝統的な perfectum―imperfectum のアスペクト対立とは位相を異にすると言うべきであろう[14]。

はじめに挙げた英語動詞の〈現在完了〉present perfect と呼ばれる形式にも，やはりアスペクトにおいて対立する imperfect にあたる形式は欠けている。その用法の中に一見して〈完了〉とは相反する〈継続〉を含み得る理由も，英語の動詞組織のこのような構造的特性に求められる。

1. 4. スラヴ語動詞における〈体〉の発達

動詞の〈完了〉perfective 対〈不完了〉imperfective というアスペクトの区別は，ロシア語を含むスラヴ語において高度に発達していることで知られる。スラヴ文法では，このアスペクトを指す用語――ロシア語 вид vid など――に対して〈体（たい）〉という訳語を使う習慣である。

一般にスラヴ語は西欧のゲルマン語やロマンス諸語に比べ，インドヨーロッパ祖語の古態をよりよく保存しているとみなされる。たとえば名詞類の格の組織において，インドヨーロッパ祖語には 8 種の格があったとされる[15] が，スラヴ語ではロシア語がこのうち 6 種[16] を保存し，なかには 7 種を保存している言語もある[17]。これらはギリシア語の 5 種[18] より多い。

このためスラヴ語動詞のアスペクト〈体〉の体系も，インドヨーロッパ祖語にあった古いアスペクトの区別を忠実に継承したものととらえられがちだが，実態は少し違うとみなければならない。ギリシア語などの状況から推定されるインドヨーロッパ祖語の動詞のアスペクト組織は，あくまで形態法上の形式によって〈完了〉〈未完了過去〉〈アオリスト〉などの差違を表わすものである。一方，スラヴ語動詞の〈体〉の体系は，語彙的に対をなす動詞の使い分けによって，〈完了〉〈不完了〉というアスペクトの区別を表わす。

つまり，スラヴ語では少数の例外を除き[19]，動詞の〈完了体〉と〈不完了体〉とが対でひと組となって，それぞれが〈現在形〉〈過去形〉という時称に応じた活用をすることにより，全体でアスペクトの別を常に明示するしくみになっている。

この場合の〈語彙的に対をなす動詞の組み合わせ〉とは，文法的な形態のように，一定の手続きによって一方から他の形式が導かれるものではない。多くの場合，両者は共通の形態素を含んでいて，**表 4・1–6** のように〈不完了体〉動詞に接頭辞が付加されて〈完了体〉動詞が派生するものが大部分を占める[20] が，一方では 7–12 のように〈完了体〉動詞のほうがベースとなり〈不完了体〉動詞を派生させている例[21] や，派生関係が直観的には判然としない 13，14 のようなタイプもある。

表 4　ロシア語の〈不完了体〉と〈完了体〉の動詞（不定詞）の対の例

	不完了体	完了体	意味
1	*думать dúmat'*	*подумать podúmat'*	「考える」
2	*видеть víd'et'*	*увидеть uvíd'et'*	「見る」
3	*есть jest'*	*съесть s-jest'*	「食べる」
4	*пить pit'*	*выпить vípit'*	「飲む」
5	*писать pisát'*	*написать napisát'*	「書く」
6	*читать čitát'*	*прочитать pročitát'*	「読む」
7	*понимать ponimát'*	*понять ponját'*	「理解する」
8	*начинать načinát'*	*начать načát'*	「始める」
9	*помогать pomogát'*	*помочь pomóc'*	「助ける」
10	*являться javlját's'a*	*явиться javít's'a*	「現われる」
11	*давать davát'*	*дать dat'*	「与える」
12	*показывать pokázyvat'*	*показать pokazát'*	「起きる」
13	*решать r'ešát'*	*решить r'ešít'*	「決める」
14	*двигать dvigát'*	*двинуть dvinút'*	「動かす」
15	*переводить p'er'evodít'*	*перевести p'er'ev'estí*	「移す」
16	*находить naxodít'*	*найти najtí*	「見いだす」
17	*лджиться ložít's'a*	*лечь l'ec'*	「横たわる」
18	*становиться stanóvit's'a*	*стать stat'*	「立つ」
19	*покупать pokupát'*	*купить kupít'*	「買う」
20	*брать brat'*	*взять vzjat'*	「取る」
21	*говорить govorít'*	*сказать skazát'*	「話す」

15 と 16 は，場所の移動を表わす動詞で定向（一方向への移動を表わす）と不定向（往復や多方向への移動を表わす）の区別のあるものに接頭辞が付いた場合，定向動詞からは〈完了体〉動詞が，不定向動詞からは〈不完了体〉動詞が生じる例である[22]。また 17 と 18 では，非強勢の再帰代名詞 *-ся -s'a* を伴う「*ся* 動詞」の形態を示す〈不完了体〉動詞が，*ся s'a* の付かない〈完了体〉動詞と組になっている。19 は共通の形態素は含んでいるものの派生関係が特殊な例であり，20 と 21 ではまったく共通の形態素を持たない，別の語幹から成る動詞が〈不完了体〉と〈完了体〉の組を形成している。

スラヴ語の動詞の〈体〉の組織がこのような形で意識され記述されるようになったのは，それほど古いことではない。個別の動詞が〈完了〉的または〈不完了〉的な意味合いを持つというだけなら，いわゆる Aktionsart[23] のレベルで処理されるが，スラヴ語ではある意味

でこれを極限まで拡張し，〈体〉を異にする動詞が互いに対をなすことによって，あたかも一つの動詞のパラダイムのように，相互補完的にアスペクトの区別を表現する文法的なシステムをつくりあげたのである[24]。

このシステムが整えられてきたプロセスと並行するように，スラヴ語の動詞の形態法は大幅に単純化が進行していく。スラヴ語の文献の伝統は 9 世紀の古教会スラヴ語に始まるが，その時点ではラテン語やギリシア語のように，動詞の形態法による過去時称の表現として〈アオリスト〉と〈未完了過去〉と呼ばれる 2 種の形式がみられる。これとは別に，BE 動詞 *byti* の現在人称変化と能動完了分詞の一種[25] との組み合わせによって回説的に表現される形式があり，〈(現在) 完了〉と呼ばれる。

現代のスラヴ語動詞ではこの中で最後のもの，すなわち回説的な〈完了〉だけが残り，一般的な過去時称を表わす形式として広く用いられる。このうちロシア語を含む東スラヴ語[26] では，BE 動詞（ロシア語 *быть byt'*）の現在人称変化が失われて規則的にゼロとなる改新が起きたために，元来は分詞起源の形態が単独で動詞の〈過去形〉と呼ばれるに至っている。もともと分詞に由来するため人称変化はない代わり，BE 動詞を繋辞 copula とする述語形容詞[27] と同じことなので，主語の性・数に一致する形を取る[28]。これはフランス語動詞の〈複合過去〉で *être* を助動詞とする場合と同様である。

このように単純化されたスラヴ語の動詞形態法において，〈完了体〉動詞の〈過去形〉はおおむねラテン語・ギリシア語動詞の〈完了〉や〈アオリスト〉のように，〈不完了体〉動詞の〈過去形〉は同じく〈未完了過去〉のように使われる。一方，〈不完了体〉動詞の現在人称変化は通常の現在時称であるのに対し，〈完了体〉動詞の現在人称変化は，〈現在〉でなく〈未来〉の時称を表わすものと位置づけられる。

つまり，〈完了体〉動詞は現在時称を欠いているということである。〈完了体〉動詞の現在人称変化が実際は未来時称を表わすものであることは，スラヴ語の内部では比較的早い時期から気づかれていた。これに対し〈不完了体〉動詞の未来時称は，BE 動詞などを助動詞に用いた回説的な〈合成未来〉で表わされる。ロシア語では〈不完了体〉動詞の未来時称の助動詞として，BE 動詞 *быть byt'* の〈未来形〉と呼ばれる形が使われるが，これはもともと〈不完了体〉動詞である *быть byt'* に対する〈完了体〉動詞の現在人称変化——つまり未来時称——であったとみていい（→ **2. 4.**）。

動詞の〈体〉の区別は，ほかにもスラヴ文法のさまざまな面にわたって広く連関してくる。たとえばロシア語では，分詞の一種である被動形動詞過去と呼ばれる形態[29] は〈完了体〉動詞にしかないため，これを述語的に用いた受動表現は〈完了体〉のみに限られることになる[30]。

以上のようにスラヴ語動詞の〈体〉のシステムは，インドヨーロッパ祖語の動詞組織のアスペクトの区別をそのまま受け継いだというより，まったく異なる独自の方式で新たに再構

成したものと言うべきだろう。

スラヴ語はこのような動詞の〈体〉によるアスペクト表現の形式を完成させる代わりに，文献の初期には保持していた豊かな動詞形態法のうちの大部分を放棄してしまった。なかでも決定的なのは，インドヨーロッパ語が伝統的に保持する〈過去の過去〉を表わす形式を失ったことである。

〈過去の過去〉を表わす動詞の形式は〈過去完了〉と呼ばれ，ギリシア語 *ὑπερσυντελικός* hypersyntelikós でもラテン語 plusquamperfectum でも形態法的に表現されるが，近代語では助動詞を用いた回説的表現に置き換わっている。ロマンス語に属するフランス語では，〈複合過去〉の助動詞 *avoir*（または *être*）の現在人称変化を〈半過去〉に変えた〈大過去〉plus-que-parfait と，同じく〈単純過去〉に変えた〈前過去（先立過去）〉passé antérieur の二とおりに分化し，さらに入り組んだシステムを作り上げている[31)]。一方ゲルマン語の英語やドイツ語では，〈現在完了〉の助動詞 *have* などの〈過去形〉とともに用いる形式を〈過去完了〉と呼んでいる。

文献初期のスラヴ語では，のちに〈過去形〉として一般化する回説的な〈完了〉の形式〔BE 動詞 +л（*l*）分詞〕の助動詞の BE 動詞を〈アオリスト〉（時に〈未完了過去〉）に変化させた形式によって，動詞の〈過去完了〉を表わしていた。しかしその後，スラヴ語の動詞組織から〈アオリスト〉も〈未完了過去〉も消失した結果，たとえば現代のロシア語には英語などの〈過去完了〉にあたる形式は存在しない[32)]。〈過去の過去〉を表わす特定の形式はなく，ただ文脈によって表現されるだけである。この一点のみをとっても，スラヴ語の動詞組織がインドヨーロッパ語の古態から大きく変容していることは明らかであろう。

スラヴ語動詞の〈体〉の用法は，それだけについて何冊もの本が出ているほど多面的で奥が深く，多くの研究者の関心を集めている。ここで述べたようなことは，ほんの初歩的な入り口の話にすぎない。ただ〈完了〉perfect という文法用語は基本的には，スラヴ語動詞の〈体〉の区別に代表されるような，〈完了〉perfective 対〈不完了〉imperfective というアスペクトの対立において理解されるべきものと言える。

1. 5. まとめ

以上にみてきた主なインドヨーロッパ系言語の動詞のアスペクト表現のあらましをここで整理しておくと，だいたい次のようになるだろう：

ギリシア語

動詞の過去時称において，〈未完了過去〉〈アオリスト〉〈完了〉の 3 種のアスペクトがすべて形態法的に区別される。時称の区別よりアスペクトのほうが上位にあった古いインドヨーロッパ語の動詞組織の形を反映する？

ラテン語〜ロマンス語

ラテン語動詞の〈完了〉にはギリシア語の〈完了〉と〈アオリスト〉が合流していて，過去時称は〈未完了過去〉との2種のアスペクトの対立となる。ロマンス語では，ラテン語動詞の〈完了〉がフランス語の〈単純過去〉（イタリア語〈遠過去〉），〈未完了過去〉が〈半過去〉に継承されている。フランス語動詞の〈単純過去〉は話し言葉では使われなくなり，代わりに〔HAVE 動詞 *avoir*（または BE 動詞 *être*）+ 過去分詞〕による回説的な〈複合過去〉（イタリア語〈近過去〉）が使われる。ラテン語動詞の〈完了〉と〈未完了過去〉のアスペクトの区別は，前者がフランス語動詞の〈単純過去〉または〈複合過去〉，後者が〈半過去〉の区別に受け継がれている。

ゲルマン語

文献の最初の段階（ゴート語）では，過去を表わす動詞の形式は1種だけであり，ギリシア語やラテン語のようなアスペクトの区別はみられない。母音交替 Ablaut を伴う動詞の〈強変化〉はインドヨーロッパ語の完了語幹の流れをくみ，ゲルマン語独特の発達である〈弱変化〉は英語 *do* の過去形 *did* に当たる要素が接尾された形を起源とする。のちにおそらくは俗ラテン語の回説的表現をモデルとして，英語 *have* などを助動詞とする〈現在完了〉の形式が成立するが，ラテン語〜ロマンス語の動詞のような perfect—imperfect のアスペクト対立とは一貫して無縁である。英語の動詞で独自に発達した〈進行形〉のアスペクトは位相を異にしていて，〈現在完了進行形〉という一見矛盾するような形式も生じている。

スラヴ語

文献初期の段階（古教会スラヴ語・古ロシア語）では，動詞の過去時称に形態法的な〈未完了過去〉〈アオリスト〉と回説的な〈完了〉の3種の形式が併存するが，語彙的な対をなす〈完了体〉と〈不完了体〉動詞の使い分けによってアスペクトの区別を表現するという，スラヴ語独特の〈体〉の組織が歴史時代を通じて整えられていくとともに，形態法的な〈未完了過去〉〈アオリスト〉の形式は消失し，過去を表わす形式はかつての〈完了〉に一本化される。動詞の〈体〉の組織によるアスペクト表現は現在・未来時称にも及び，インドヨーロッパ祖語の動詞が本来持っていたと想定されるアスペクトの体系からは大きく作り替えられて，面目を一新している。

英語は世界で最も学習者の多い言語であり，〈完了〉という文法用語にも，英文法で用いられる〈現在完了〉によって初めて接する人が大部分と思われる。しかし，英語を含むゲルマン語は歴史的に，動詞の〈不完了〉のアスペクトを明示的に表わす形式を一貫して欠いていて，英文法における〈完了〉という用語は〈不完了〉とのアスペクト上の対立を含まない。

言語トピックの重要なキーワードでもある〈完了〉という用語が，このようにやや変則的で紛らわしく，あえて言えばミスリーディングな使われ方をしている英文法の文脈において，この用語に最初に接する学習者が圧倒的に多いという事実は，だれにもどうにも動かしようのない，不条理なめぐり合わせ――と言うべきだろうか。

2. 〈未来形〉は〈未来〉を表わすか

われわれが文法を記述する枠組みの原形が，古代ギリシアに端を発することはよく知られている。「文法」という用語そのものが英語 grammar などの訳語であり，これらはすべてギリシア語 *γραμματική* grammatikhḗ を語源としている。

ギリシア文法はヘレニズム世界の威信ある共通語であったギリシア語の記述を目的としていたが，ギリシア語を熱心に学んだローマ人たちは，ギリシアの文法用語の多くをラテン語に翻訳した。やがてラテン語自体が威信ある言語として広く学ばれるようになり，その学習を通じてラテン語の文法用語が普及していく。

のちになって判明したことであるが，ギリシア語とラテン語は，ともにインドヨーロッパ語族という同じ系統に属する同族の言語である。それだけでなく，ドイツ語などのゲルマン語，ロシア語などのスラヴ語という，近代にかけて有力となるヨーロッパの主要言語の大半も，同じ語族に含まれる。ギリシア語で成立した文法記述の枠組みが，ラテン語にも近代ヨーロッパの主要言語にもさほどの無理なく通用し得た背景には，この同系性という要因が最も大きく働いている。

この枠組みはその後，ヨーロッパだけでなく世界中の言語の文法記述に試みられ，たとえば明治以来の日本語の伝統文法も，名詞・動詞という品詞分類ひとつをとってみても，その影響を免れてはいない。こうした枠組みを，系統的にも類型的にもまったく異なる言語に対して適用しようとすることの弊害については，繰り返し指摘されてきた。

しかしここで取り上げるのは，そのことではない。この枠組みが最初に適用されたギリシア語やラテン語の文法においても，その言語的事実を最も適切に記述し得ていたと言い切れるのか――という問いである。

2. 1. 〈法〉と〈時称〉

動詞の〈時称〉を〈現在〉〈過去〉〈未来〉の 3 種に区分するのも，ギリシア文法に始まることである。〈時称〉はギリシア語 *χρόνος* chrónos がラテン語 tempus に訳されたが，どちらも文法用語に限らず，「時」を表わす一般的な名詞である。このラテン語 tempus がフランス語経由で英語に借用され tense となる。

動詞の範疇は，まず最初に〈直説法〉〈命令法〉〈接続法〉などの〈法〉mood[33] の区別が

あり，〈時称〉はその下位に来る。〈現在〉〈過去〉〈未来〉という「時」の区別が実効性をもつのは，特に話者の思い入れを込めずに叙述する〈直説法[34]〉indicatitive[35] の場合である。

〈直説法〉以外の〈法〉のうち，〈命令法〉imperative[36] は比較的明確でわかりやすいが，問題は〈接続法〉〈希求法〉〈願望法〉〈仮定法〉〈条件法〉などの名称で呼ばれる〈非・直説法〉で，用語上も少なからず錯綜・混乱している。〈接続法〉は古典語から近代語まで広く使われる用語で，ギリシア語 *ὑποτακτική* hypotaktikḗ，ラテン語では conjunctivus または subjunctivus だが，近代のロマンス文法では後者が好んで使われる。英文法でも subjunctive を使うが，これを通常は〈仮定法〉と意訳している[37]。これに対しドイツ文法では〈接続法〉として通常 Konjunktiv が用いられる。

〈接続法〉の名の由来は，従属接続詞によって導かれる従属節の中で使われる用法で，その中には間接話法も含まれる。一方，英語 *if* のように仮定を表わす節の中で――とりわけ現実に反する仮定に――用いられる用法があり，これに着目すれば〈仮定法〉となる。さらに，「……ではないか（と恐れる）」「……であればよいが（と願う）」など，話者のさまざまな思い入れを込めて使われる用法，そこから進んで相手に対し遠慮がちに頼む儀礼的な用法など多岐にわたる。

ギリシア文法にはこの〈接続法〉とは別に，話者の希望や願いを込めて表現する〈法〉である *εὐκτική* euktikḗ があり，ラテン語で optativus と呼ばれ，通常は〈希求法〉と訳されるが，〈願望法〉という訳語も使われる。しかし，一方で〈願望法〉には別に desiderativus の訳語としての用法もある。これはギリシア語・ラテン語の古典文法の体系の中に明確に現われてはいないが，インドのサンスクリット文法に見える形との比較の結果，インドヨーロッパ祖語の動詞体系の中に存在したと推定される〈法〉で，これに対して〈希求法〉の訳語が用いられることもあるので紛らわしい。ここでは optativus を〈希求法〉，desiderativus を〈願望法〉とする用語法に従う。

ラテン文法にはギリシア語のような optativus〈希求法〉はなく，その用法は conjunctivus〈接続法〉に流れ込んでいるとされる。近代語の〈接続法〉はしたがってギリシア語の〈希求法〉と〈接続法〉の両方の用法を受け継いでいると言える。

〈条件法〉は近代のロマンス語で新しく発達した形式で，フランス語 conditionel などと呼ばれる[38]。後述する直説法〈未来形〉（→ **2. 2.**）と共通の形成法に由来し[39]，ラテン語動詞の〈接続法〉の機能の一部を肩代わりしている。英語・ドイツ語の未来の助動詞 *will / shall*，*werden*（→ **2. 3.**）の仮定法（過去）ないし接続法形 *would / should*，*würde* を用いる回説的表現も，同様に〈条件法〉と呼ばれることがある。

なお，古い時代のスラヴ語動詞は直説法に関しては，ギリシア・ラテンの古典語と同じように豊かな形態法によって時称やアスペクトを表現する形式を持つ（← **1. 4.**）が，〈接続法〉は早い時期から単純化が進み，起源的に BE 動詞の接続法形に由来する形を助動詞とし，直

説法過去時称の形式と同じ *л*（*l*）分詞[40]と組み合わせる回説的表現だけが用いられてきた[41]。現代ロシア語で〈仮定法〉（または〈接続法〉）の助動詞として使われる，BE 動詞 *быть byt'* の接続法形 *бы by* は，主語の人称・数にかかわらず不変化となり，*л*（*l*）分詞すなわち動詞の〈過去形〉（← **1. 4.**）に添えて〈接続法〉を示す単なるマーカー（目印）と感じられるに至っている。

非・直説法の〈接続法〉などにおいては，動作や状態は話者の想念の中にあるだけで，実際に起きているわけではない。したがって，〈現在〉とか〈過去〉といった時称の用語を用いても，現実の時間経過の前後関係とはあまり関係がない。英文法の〈仮定法現在〉や〈仮定法過去〉という名称は，〈現在〉や〈過去〉を表わす直説法の形に形態的に対応することを示しているにすぎない[42]。このことを明確にするために現代ドイツ文法では，〈現在〉〈過去〉の代わりに〈接続法 1 式〉Konjunktiv 1 ／〈接続法 2 式〉Konjunktiv 2 などの用語を用いている[43]。以下では，原則として直説法における〈時称〉に議論をしぼることにする。

2. 2. ギリシア・ラテン語と主要ロマンス語の〈未来形〉

ギリシア語で〈未来形〉*μέλλων* méllōn と名づけられた動詞の形態は，語幹に続く -s- をマーカーとしている。これはインドヨーロッパ比較文法の成果により，祖語に存在した〈願望法〉desiderativus に由来することが知られている。

ラテン語の動詞にも〈未来形〉fūturum と呼ばれる形態があるが，その起源はギリシア語の場合とは異なっている。ラテン語の〈未来形〉の形成法には動詞によっていくつかの方式があり，その中で多数の動詞に適用される生産的なタイプは，インドヨーロッパ語の語根 *bheu- に由来する *-b-* をマーカーとしている。この *bheu- はインドヨーロッパ諸語の BE 動詞のパラダイム[44]にたびたび現われる語根で，たとえば英語では不定詞 *be* と過去分詞 *been*，ドイツ語では直説法現在一・二人称形 *bin, bist* の語頭の要素，ロシア語では不定詞 *быть byt'* はじめ未来形 *буду búdu, будешь búd'eš,* …や分詞起源の過去形 *был byl, была bylá,* …（← **1. 4.**）などに広く現われる。そしてラテン語自体の中でも，BE 動詞 *sum* の完了形 *fuī* に現われている[45]。

BE 動詞のパラダイムに広く現われる語根 *bheu- を用いて動詞の〈未来形〉を作る方法は，ラテン語が独自に発達させたものとみられるが，しかしこの形式は比較的短命であった。ラテン語から分化した現代のロマンス諸語の動詞は，〈未来形〉と呼ぶ形式を持っているが，ラテン語動詞の〈未来形〉を直接受け継いでいる例はなく，すべて新たに作り出された形式によっている。

フランス語・イタリア語・スペイン語など主要なロマンス語動詞の〈未来形〉は，*-r-* をマーカーとしているようにみえ，人称変化はフランス語 *avoir* など「持つ」を原義とする HAVE 動詞の現在人称変化に等しい。この *-r-* は動詞の不定詞に由来する要素で[46]，不定詞

表 5　ラテン語の動詞 *amō*（「愛する」）の未来人称変化

	sg.	pl.
1	*amābō*	*amābimus*
2	*amābis*	*amābitis*
3	*mābit*	*amābunt*

表 6　主要ロマンス語の動詞「愛する」の未来人称変化

	フランス語 *aimer*		イタリア語 *amare*		スペイン語 *amar*	
	sg.	pl.	sg.	pl.	sg.	pl.
1	*j'aimerai*	*nous aimerons*	*amerò*	*ameremo*	*amaré*	*amaremos*
2	*tu aimeras*	*vous aimerez*	*amerai*	*amerete*	*amarás*	*amaréis*
3	*il aimera*	*ils aimeront*	*amerà*	*ameranno*	*amará*	*amarán*

表 7　同じく動詞「持つ」の現在人称変化

	フランス語 *avoir*		イタリア語 *avere*		スペイン語 *haber*[48]	
	sg.	pl.	sg.	pl.	sg.	pl.
1	*j'ai*	*nous avons*	*ho*	*abbiamo*	*he*	*hemos*
2	*tu as*	*vous avez*	*hai*	*avete*	*has*	*habéis*
3	*il a*	*ils ont*	*hai*	*hanno*	*ha*(*y*)	*han*

に HAVE 動詞の現在人称変化が接尾的に融合した形態を示している[47]。

なおギリシア・ラテン両古典語の未来時称は，上に述べた〈未来形〉を不完了 imperfective とし，完了 perfective にあたる〈未来完了〉と対立させるアスペクトの体系を持っている。ただしギリシア語動詞の〈未来完了〉は，中・受動相では形態法的に表わされるが，能動相では〔BE 動詞 *εἰμὶ* eimí の〈未来形〉+ 完了分詞〕という回説的表現になっている。

ラテン語動詞の〈未来完了〉の形態も，ロマンス諸語には伝わっていない。その用法を受け継いでいるのは，フランス語で〈前未来〉futur antérieur と呼ばれる形式で，〈複合過去〉の助動詞として使われる HAVE 動詞 *avoir*（または BE 動詞 *être*）の現在人称変化を〈未来形〉に変えた回説的表現である。

2. 3. ゲルマン語の回節的〈未来〉表現

古いゲルマン語は **1. 3.** にも述べたように，動詞の時称形として〈現在形〉と〈過去形〉の 2 種しか持っていない。ゴート語訳聖書では，ギリシア語の〈未来形〉も〈現在形〉で訳している例が多い[49]。

表 8　標準英語の〈単純未来〉と〈意志未来〉の人称による使い分けの規範

単純未来		意志未来	
I / we shall…	*shall you*…？	*I / we will*…	*will you*…？
you will…		*you shall*…	
he / she / it / they will…		*he / she / it / they shall*…	

ゲルマン語には形態法的な〈未来形〉はかつて現われたことがなく，のちに英語 *will / shall* やドイツ語 *werden* のような助動詞を使った回説的表現が〈未来形〉と呼ばれるようになっている。しかし，たとえば〔「なる」を原義とする助動詞 *werden* + 不定詞〕によるドイツ語の〈未来形〉の使用は今もなお，あくまで optional にとどまる。つまり，未来に属する事柄であれば自動的あるいは義務的に〈未来形〉が使われるわけではなくて，たとえば *morgen*（「明日」）や *nächste Woche*（「来週」）など，未来を表わす副詞（句）とともに〈現在形〉が使われることは少しも珍しくない。

英語で〈未来形〉の助動詞として使われる *will* と *shall* はもともと *can*，*may*，*must* など，〈法助動詞〉modal auxiliary と呼ばれる一群の語と同類で，その主な特徴は（1）現在三人称単数の語尾 -(*e*)*s* が付かない[50]こと，（2）*to* を伴わない裸の不定詞 bare infinitive とともに使われること，（3）話者の主観に基づく意味合いを付け加えること――などである。

このうち *will* は名詞形 *the will*（「意志」）からもうかがえるように，「……したい」という話者の意志，*shall* はその主語となるものに対して話者が「……すべきである，……してほしい」という要請を表わすのが，それぞれの元の意味であった。いわゆる標準英語 Standard English の規範ではこれらの助動詞の原義に応じて，話者の意志と無関係な〈単純未来〉と話者の意志を込めた〈意志未来〉とを人称によって使い分け，一人称（および二人称疑問文）は *shall* を使えば〈単純未来〉で *will* を使えば〈意志未来〉，三人称（および二人称平叙文）では *will* を使えば〈単純未来〉で *shall* を使えば〈意志未来〉としている（**表 8** 参照）。

しかし，このような煩雑な規範は米語ではほとんど失われ，一人称の〈単純未来〉にも *will* を用いることが広く行なわれる。さらに *I'll*，*we'll* のような縮約形になると，もはやその原義はすっかり忘れ去られ，未来時称を表わす単なるマーカーと感じられるに至っている。それとともに，未来の表現には自動的に〈未来形〉を用いるという義務化が進み，その意味ではロマンス語の〈未来形〉の用法に近づいていると言える。

2. 4. スラヴ語のアスペクト組織と〈未来〉時称

スラヴ語では早い時期から，〈完了体〉を表わす動詞の現在人称変化が実際は未来時称――ギリシア語の〈未来完了〉に相当すると理解されていたことは，**1. 4.** でも述べた。〈完了体〉と〈不完了体〉を表わす動詞の対によるアスペクト組織が整えられるにつれ，この〈完

了体〉動詞の現在人称変化によって表わされる未来時称に対応する〈不完了体〉の表現として，助動詞を用いた回説的形式が発達する。

ロシア語ではBE動詞 *быть byt'* の〈未来形〉を助動詞に用い，〈不完了体〉動詞の不定詞と組み合わせる〈合成未来〉の使用が一般化していくが，**1.4.** でも少し触れたように，ロシア語に代表される東スラヴ諸語ではBE動詞 *быть byt'* の現在人称変化が規則的に失われてゼロとなり，本来は三人称単数形に由来する *есть jest'* が不変化で存在の強調表現に用いられるだけになっている。ロシア文法においてこの *быть byt'* は〈不完了体〉のみの動詞で，対応する〈完了体〉はないと位置づけられるが，一方で形態法的な〈未来形〉をもつ動詞は唯一 *быть byt'* だけともされている。しかし，*быть byt'* の〈未来形〉とは明らかに現在人称変化であり（**表 9–10** 参照），現在人称変化が実質的に未来時称を表わすのは〈完了体〉動詞の性質にほかならないことから，本来は *быть byt'* の失われた現在人称変化が表わす〈不完了体〉に対応する〈完了体〉の動詞であった由来がうかがわれる。

このようにスラヴ語の動詞の未来時称は，独特のアスペクト組織と密接に結びついて発達した点で特徴的なものである。とりわけ，〈完了体〉動詞の現在人称変化がそのままで実質的に〈未来完了〉の意味をもつことは，回説的な表現であるロマンス語の〈前未来〉，まして助動詞を二重に用いることになり，使用頻度のきわめて低いゲルマン語の〈未来完了〉——英語〔*will have* + 過去分詞〕やドイツ語〔*werden*…過去分詞 + *haben*〕——などと同列には語れない。

表 9　ロシア語 *быть byt'* の〈未来形〉の人称変化

	sg.		pl.	
1	*я ja*	*буду búdu*	*мы my*	*будем búd'em*
2	*ты ty*	*будешь búd'eš*	*вы vy*	*будете búd'et'e*
3	*он on* *она oná* *оно onó*	*будет búd'et*	*они oní*	*будут búdut*

表 10　同タイプの完了体動詞 *дунуть dúnut'*（「吹く」）の現在人称変化[51]

	sg.		pl.	
1	*я ja*	*дуну dúnu*	*мы my*	*дунем dún'em*
2	*ты ty*	*дунешь dún'eš*	*вы vy*	*дунете dún'et'e*
3	*он on* *она oná* *оно onó*	*дунет dún'et*	*они oní*	*дунут dúnut*

〈不完了体〉動詞に対する回説的な未来時称の形式にしても，このアスペクト組織に引っぱられる形で発達してきたという背景を持つ。この場合の助動詞としてはBE動詞のほか，「持つ」「欲する」「始める」などを原義とする動詞が各スラヴ語で使われてきたが，これらは元の意味のニュアンスを多少とも残している例が多いとされる。

2. 5. 〈未来〉時称以外の未来表現

ここまでは文法的な〈時称〉の枠組みの内部で，いわば正式に〈未来形〉と位置づけられている形式についてみてきたが，言語によってはほかにも，これらの〈未来形〉とほぼ同じような意味合いで用いられる形式を持つ例がある。たとえば英語では〈近い未来〉を表わすのに〈現在進行形〉や〔*be going to* + 不定詞〕の形が使われるが，後者は「行く」を意味する動詞 *go* を一種の助動詞として〈現在進行形〉に組み込み，*to* 付きの不定詞とともに用いるものである。

フランス語でも，やはり「行く」を意味する *aller* を助動詞として〈近い未来〉を表わす表現〔*aller* + 不定詞〕があり[52]，これには前掲の英語の語法の影響も指摘されている。

一方バルカン半島では，ロマンス語に属するルーマニア語，スラヴ語に属するブルガリア語やセルビア・クロアティア語，それにアルバニア語，現代ギリシア語といった，系統的に離れた諸言語の間で共通の言語特徴が見出される「言語連合」の存在が，戦前のデンマーク人研究者サンフェル K.Sandfeld[53] 以来指摘されているが，その目立った徴条の一つが未来表現の形式とされる。

それは，「欲する」を原義とする不変化の語詞，あるいはこれに接続詞が融合した形を〈未来〉のマーカーとして用い，その後に動詞の直説法または接続法の人称形を続けるというものである。上に述べたヨーロッパの主要な大言語では，未来時称の表現に動詞の不定詞 infinitive が多用されているのに対し，バルカン半島の中小言語には動詞の不定詞形やその使用が大幅に後退しているケースが多いために，本来は接続詞に導かれた節 clause の形式に由来する表現が用いられる。

バルカン諸言語の未来表現「私は書くだろう」

現代ギリシア語　*θά γράφω* / *γράψω*　（thá gráphō / grápsō）

＊*θά*（thá）＜*θέλω νά*（thélō ná）＜*θέλω ἵνα*（thélō hína）：‘I wish that’

ブルガリア語　　ště píša / na-píša

＊ ště＜*khŭište : ‘he wishes’

アルバニア語　　dot shtruaj

＊ dot＜do të : ‘he wishes that’

ルーマニア語　　o să scríŭ

＊ o să: 'he wishes whether'

（泉井久之助『ヨーロッパの言語』p. 91–4 による）

ただし泉井同書（p. 93–5）は，この言語連合に属する諸言語の中でも上に挙げた形式が未来を表わす唯一の表現とは限らないこと，またこの形式による未来表現の持つニュアンスもさまざまであること――を指摘している。

2. 6. まとめ

泉井前掲書はさらに，次のように述べる（p. 126–7）：

> 言語のいずれを問わず，そこにいわゆる未来の表現形式があるとき，それに関して常に問題となるのは，その形式がどの程度まで純粋に未来性を表現しているかの純度の点である。（中略）しかし所詮 100% の未来性を持つ形はどこの言語にもないことである。（中略）あらゆる言語のあらゆる未来表現のすべての様式について，その内容の「未来性の純度」がつねに問題となって来る。もちろんそれが 100% のものはない。

実際，われわれの具体的な生活の中で，期待も懸念も伴わない真に直説法的な〈未来〉について語る機会が，どれほどあるだろうか。せいぜい，客観的データに基づいて中立的に予測する天気予報とか景況見通しのような場面に限られるのではないだろうか。

さらに一歩踏み込むならば，これらの表現が文法的な枠組みの中で，〈未来〉という〈時〉を表わすものとして位置づけられたのはなぜなのか――という問題に突き当たる。それは明らかに，ギリシア文法に始まるヨーロッパの文法記述の伝統によっている。

〈現在〉〈過去〉〈未来〉という時間の三分法――それは文法用語を離れて，われわれが時間というものをとらえる際の基本的な観念ともなっている――とりわけ，〈現在〉を境にして無限の〈過去〉から無限の〈未来〉へと流れていく時間のイメージ，ないし〈過去〉と〈未来〉をいわば一種の対称性においてとらえる時間意識に，「言語は〈現在〉〈過去〉〈未来〉という〈時〉の区別を表わすべきである」とする言語イデオロギーが組み合わさって，このような文法記述にギリシア人を駆り立てたとみられる。

換言すれば，言語使用の実態そのものに対する観察や分析よりも，「言語は〈現在〉〈過去〉〈未来〉の 3 時称を備えているべきである」という理念・イデオロギーのほうが先にあったのではないか――ということである。そのような理念のもとにギリシア人は，動詞のあるカテゴリーを〈未来形〉と命名し，ギリシア文法を学んだローマ人もこれを踏襲して，ラテン文法に適用した。

やがて，近代ヨーロッパ主要言語の話者らが古典文法にならって自身の言語の文法を記述

しようとしたとき，やはり同じ枠組みを採用し，〈未来形〉と呼ばれるべき形式を自身の言語の中に探した――というのが真相ではないかと思われる。しかしその用語法が，記述対象の言語事実をどの程度忠実に反映した，適切で妥当なものであったかについては，オリジナルとなったギリシア語の場合でさえ，すでに疑問の余地があると言わなければならない。

〈未来形〉ははたして〈未来〉を表わすものであるか。つまり，その形式で表わされる意味合いの主眼は〈時〉にあると言えるのか。〈現在形〉〈過去形〉も厳密には〈現在〉〈過去〉という〈時〉だけを表わすものではないが，形式に対する名称および文法上の位置づけと実際の意味・用法との乖離は，〈未来形〉において最も著しい。

ちなみに日本語の伝統文法では〈時称〉というカテゴリーを採用していないため，文法的に〈未来〉の表現と位置づけられている形式はない。いわゆる〈未来形〉を訳す際の慣用的使用が定着している「…だろう」「…でしょう」「…よう」などの語法は，伝統文法では〈推量〉を表わすとされる形式で，〈時称〉ではなくむしろ〈法〉あるいは〈話法〉modality の一種に近いものとして位置づけられている。

要するに，〈現在〉を境にして〈過去〉と〈未来〉を鏡像的・対称的にとらえるような時間意識は，言語使用においては実態とかけ離れた幻想にすぎない。しかしながら，そのような幻想に基づいて案出された用語法が，言語や文法に関するわれわれの議論を今もって縛っている。これも〈言語を語る言語〉に課せられた，歴史的制約の一つである。

注――――――――

1）現在完了とは助動詞 *have* の現在形とともに使われる形式を指す。
2）単に BE 動詞 + 現在分詞という形式であれば，スペイン語などにも例がある。
3）「……したことがない」という否定形での用法がむしろ多い。
4）英文法における状態動詞と動作動詞の区別のように，個別の動詞が語彙的属性として持つ持続性の有無などの違いは，ドイツ語の術語で Aktionsart と呼び，文法的な範疇であるアスペクトと区別する。
5）この場合，過去分詞は BE 動詞とともに用いられた述語的形容詞と同じことになるので，主語の性・数に一致する形態を取る。
6）ギリシア語ではむしろ，現在・過去・未来という時称の体系よりアスペクトの区別のほうが上位にあり，不完了アスペクトの〈現在〉が完了アスペクトの〈（現在）完了〉とともに現在時称を構成すると説明されることもある。この場合，過去時称は〈未完了過去〉と〈アオリスト〉と〈過去完了〉の 3 種のアスペクトから構成されることになる。
7）これに対しては別の見方もある。すなわち，(1) 強勢アクセントの語頭音節への固定や (2)「グリムの法則」として知られる子音推移など，音声面に著しい特徴を持つゲルマン語を，未知の言語集団が外部からもたらされたインドヨーロッパ語を受容することによって生じた――とみなし，その動詞の時称体系の極端な単純さも，先行する未知の基層言語の反映である可能性を指摘する。
8）ラテン語 *faciō*「する，作る」の完了形 *fēcī*（単数一人称）参照。

9）特に英語では，元来は強変化だった動詞が類推によって弱変化に移行している例が数多くみられる。ドイツ語 *helfen—half—geholfen*「助ける」に対する英語 *help—helped—helped* など参照。

10）ドイツ語の過去分詞には接頭辞 *ge-* が規則的に付加されるようになっている。この接頭辞はもともと完了の意味合いを持っていた。注 49）参照。

11）「迂言的」とも訳される。

12）ただしドイツ語では，述語的用法の形容詞が主語と性・数において一致する現象はすでに消失しているので，助動詞が *sein* の場合でも，過去分詞の形態に変化はない。

13）この形はもともと，他動詞において対格目的語と完了分詞とを同格に置き，「……されたものとして持つ」と表現したのが原義とされる。

14）英語動詞のアスペクトの表現形式は，［＋完了←→－完了］の対立が上位に，［＋進行←→－進行］の対立がその下位に位置すると考えられる。

15）主にサンスクリット語の格組織を根拠とする推定。主 nominative・属 genitive・与 dative・対 accusative・奪 ablative・位（＝処）locative・具 instrumental・呼格 vocative の 8 種。

16）主・生（＝属）・与・対・造（＝具）・前置格（位格に由来するが，現代語では常に前置詞を伴って用いられるためこの名称がある）の 6 種。

17）ウクライナ語では上記ロシア語の 6 種に加えて呼格がある。

18）主・属・与・対・呼格の 5 種。なお同じく古典語のラテン語ではこれに奪格が加わる。

19）〈完了体〉〈不完了体〉のいずれか一方のみを持つ動詞も，少数ながら存在する。

20）〈不完了体〉動詞から〈完了体〉動詞を派生させる接頭辞として最も一般的なのが，1 の *по-pо-* である。

21）11–12 の〈不完了体〉動詞はもともと，〈完了体〉動詞から派生した多回体動詞（何度も……する）に由来している。

22）ここでは定向動詞の *вести v'estí*（運ぶ），*идти idtí*（行く，歩く）と対応する不定向動詞の *водить vodít'*，*ходить xodít'* に，それぞれ *пере- p'er'e-*，*на- na-* という接頭辞が付いている。

23）注 4）参照。

24）語彙的な対をなす動詞の組による文法システムとは，少し分かりにくいようだが，これがアスペクトでなく自動・他動あるいは能動・受動という voice の区別なら，たとえば日本語の動詞の一部にも，いくつかのタイプに分類される対が認められる：「通る」「通す」，「当たる」「当てる」，「飛ぶ」「飛ばす」，「向く」「向ける」，「刺さる」「刺す」，「抜ける」「抜く」，「溶ける」「溶かす」，「落ちる」「落とす」，「浮かぶ」「浮かべる」，など。

　これらは形態法的な手続きで一方から他が導かれるものではなく，それぞれ共通部分と異なる活用部分を持つ動詞の組が個別にできている。もちろんこのような対は日本語の動詞体系の全般に及んでいるわけではないけれども，あるカテゴリーが語彙的に対をなす語の組によって形成されることの例示にはなるだろう。

25）語尾の *-l-* を特徴とするため *l* エル分詞と呼ばれる。

26）ロシア語のほかウクライナ語とベラルーシ語が属する。

27）BE 動詞の現在人称変化がゼロ化した東スラヴ語では，現在時称はゼロ動詞・ゼロ繋辞の文となる。

28）つまりロシア語では動詞の〈過去形〉が人称変化をしないという，インドヨーロッパ語としてはきわめて変則的な形態を示していることになる。このためロシア語の過去時称では主語人称

代名詞が必須となり，それに引っぱられる形で，人称変化が完備している現在（未来）時称でも主語人称代名詞がよく使われる傾向にある。これに対し東スラヴ語以外の，たとえば西スラヴ語のポーランド語などでは，過去時称を作る助動詞の BE 動詞が消滅せず，*l* 分詞の後に融合して人称変化を示す。このため現在形でも過去形でも，古典語やイタリア語・スペイン語などと同様，主語人称代名詞は省略される場合が多い。

29）＝完了受動分詞。〈被動〉は〈受動〉，〈形動詞〉は〈（形容詞的用法の）分詞〉の，それぞれスラヴ文法における用語。また分詞の名称において〈過去〉は〈完了〉，〈現在〉は〈未完了〉と同義になる。過去分詞＝完了分詞，現在分詞＝未完了分詞。

30）ロシア語の〈不完了体〉には原則として受動表現はないが，主語が三人称の無生物＝不活動体の場合に限り，再帰代名詞 *ся sʹa* による再帰表現の形で規則的に表わされる。

31）助動詞に〈単純過去〉を用いる〈前過去〉は〈単純過去〉と同様，話し言葉では用いられなくなっている。

32）このため西欧近代語のような「時の一致」の現象もみられない。

33）ラテン語 modus，ギリシア語 *ἔγκλισις* égklisis。

34）これに対し特にゲルマン文法で〈叙実法〉の用語を当て，〈接続法〉あるいは〈希求（願望）法〉にあたるものを指す〈叙想法〉と対比する用語法もある。

35）ラテン語 indicativus，ギリシア語 *ὁριστική* horistikḗ 。

36）ラテン語 imperativus，ギリシア語 *προστατική* prostatikḗ 。

37）〈仮定法〉はむしろ，後述の conditionel（通常は〈条件法〉）の訳語として使われることもある（→注 38）。

38）これに対して〈仮定法〉の訳語を用いる例もある（←注 37）。

39）直説法〈未来形〉で動詞の不定詞に融合している HAVE 動詞（フランス語 *avoir* など）の現在人称変化の代わりに〈単純過去〉を融合させた形態。

40）**1. 4.** 注 25）参照。

41）回説的表現であることから〈条件法〉とも呼ばれる。またロシア文法では〈仮定法〉の用語が使われることも多い。

42）実際に過去の仮定などを表わす形式は〈仮定法過去完了〉となる。

43）ドイツ語の接続法 1 式は英語の仮定法現在，接続法 2 式は同じく仮定法過去に相当する。ドイツ語では間接話法における接続法の使用を義務的とする規範があったが，今日では英語と同様に直説法が使用される例も増えている。間接話法以外の用法として，接続法 1 式は願望の表現，2 式は英語の仮定法過去と同様，事実に反する仮定と儀礼的婉曲表現が主なものである。英語の仮定法現在の使用は後退しているものの，*God bless*…（「神の祝福あれ」）のような成句に痕跡的に残っている。

44）存在または繋辞 copulative の動詞として使われる BE 動詞はインドヨーロッパ系の各言語において，複数の語根に由来する形態がモザイク状に集まって活用のパラダイムを形成している例がほとんどである。

45）これはフランス語 *être* の単純過去形 *fus* につながっている。なお *sum*，*fuī* はいずれも一人称単数形。古典語では，動詞は直説法能動相現在一人称単数の形で代表させ，各時称の形もやはり一人称単数形で引用する習慣である。

46）フランス語の動詞で最も数が多く規則動詞とも言える *er* 動詞では，不定詞形の語末の *-r* は実

際には脱落しているが，ここでは母音 *a-* で始まる *avoir* の現在人称変化と連接したために保持された。

47）不規則な *avoir* や *être* の未来形は，不定詞の語幹が縮約している。なおロマンス語では「なる」を意味するラテン語 *stō*（不定詞 *stāre*）が BE 動詞と同じように使われ，しばしば BE 動詞のパラダイムに混入している。フランス語では不定詞 *être*，過去分詞 *été* などがそうである。ちなみにラテン語 *stō* は英語 *stand* やロシア語 *стать stat'*「立つ（完了体）」などと共通のインドヨーロッパ語根 *sta- を含む形。

48）単独で「持つ」を意味する用法は，スペイン語ではほとんど失われている。

49）指摘されているのは，ギリシア語の未来時称を現在形で訳したゴート語の動詞に，接頭辞 *ga-* の付加された形が多いことである。これは，のちにドイツ語の過去分詞に規則的に付くようになる接頭辞 *ge-* と同源で，接頭辞の付加された動詞の現在形が未来完了的な意味で使われるのは，スラヴ語において組織的に発達する〈完了体〉動詞の造語法（← **1. 4.**）と並行する現象とみられる。注 10）参照。

50）これは，この類の語の大半がもともと属していた過去現在動詞（完了現在動詞）と呼ばれる動詞の性質から来ている。過去現在動詞は，インドヨーロッパ語の完了語幹に由来する形態（← **1–3.**）を現在時称に用いる動詞で，人称変化は過去形に準じ，ゲルマン語では単数一人称と同三人称が同形となる。同タイプの動詞はギリシア語にもあり，*οἶδα oida*「知っている」は形態は完了（原義「見た」）だが，実際には現在時称として扱われる。

51）〈完了体〉動詞なので現在人称変化が実質的に未来時称を表わす（「吹いてしまうだろう」）。

52）たとえば *'je vais partir.'*（「私はこれから出発します」）。*vais* は *aller* の直説法現在一人称単数。

53）サンフェルのデンマーク語による著作 *Balkanfilogien: En oversigt over dens resultater of problemer* は 1926 年コペンハーゲンで，仏訳 *Linguistique balkanique: problèmes et résultats* は 1930 年パリで刊行された。松本克己『世界言語への視座：歴史言語学と言語類型論』p. 102。

参 考 文 献

泉井久之助『ヨーロッパの言語』（1968，岩波書店）
風間喜代三『ラテン語とギリシア語』（1998，三省堂）
片岡孝三郎『ロマンス語歴史文法：ロマンス語言語学叢書 3』（1982，朝日出版社）
木村彰一『古代教会スラブ語入門』（1985，白水社）
高津春繁『印欧語比較文法』（1954，岩波書店）
小島公一郎『ドイツ語史』（1964，大学書林）
佐々木秀夫『ロシヤ古文典』（1982，ナウカ）
島岡茂『ロマンス語比較文法』（1986，大学書林）
下宮忠雄『ヨーロッパ諸語の類型論』（2001，学習院大学研究叢書 33）
同『歴史比較言語学入門』（1999，開拓社）
同「テンスとアスペクト」：『ヨーロッパの言語の旅』（1995，近代文芸社）所収
同「ヨーロッパ諸語比較文法の構想」「複合時制の発達：ゲルマン語とロマンス語を中心に」：『ヨーロッパの言語と文化』（1993，近代文芸社）所収
同「印欧言語学と言語連合の問題」：エネルゲイア刊行会編『言語における思想性と技術性』（1975，

朝日出版社）所収
高橋輝和『ゴート語入門：改訂版』（1999，クロノス）
同『古期ドイツ語文法』（1994，大学書林）
田中美知太郎・松平千秋『ギリシア語入門：改訂版』（1962，岩波書店）
中島文雄『英語発達史：改訂版』（1979，岩波書店）
千種眞一『ゴート語の聖書』（1989，大学書林）
原求作『ロシア語史講話』（1996，水声社）
松平千秋・國原吉之助『新ラテン文法』（1992，東洋出版）
松本克己『世界言語への視座：歴史言語学と言語類型論』（2006，三省堂）
目黒三郎・徳尾俊彦・目黒士門『新フランス広文典』（1966，白水社）
モセ，F. Fernand Mossé，高橋博訳『ゲルマン語・英語迂言形の歴史』（1993，青山社）
山口巌『ロシア中世文法史』（1991，名古屋大学出版会）
吉川直『スラヴ諸民族語比較文法：新約聖書の“主の祈り”祈禱文を基本線にした比較文法』（1999，吉川直）
リカード，P. Peter Rickard，伊藤忠夫・高橋秀雄訳『フランス語史を学ぶ人のために』（1995，世界思想社）